【国際研究集会】

「名所」の形成と デジタル文学地図

主催：2020 年度大阪大学文学研究科国際共同研究力向上推進プログラム
「デジタル文学地図の構築と日本文化研究・教育への貢献」（代表者:飯倉洋一）

- 開会挨拶　デジタル文学地図について
  飯倉　洋一（大阪大学）

司会　勢田　道生（大阪大学）

- 発表①　名所の形成と名所イメージの構築―『平家物語』の築島伝説を手掛かりに―
  金　智慧（大阪大学大学院）

- 発表②『摂津名所図会』における名所形成と近世演劇―「逆櫓松」「朝日神明宮」を例として―
  岡部　祐佳（大阪大学大学院）

・・・・・・・・休憩・・・・・・・・

司会　中尾　薫（大阪大学）

- 発表③　19 世紀における地誌の広がり―名所図会と奇談的地誌―
  木越　俊介（国文学研究資料館）

- 発表④　紀行文と名所―江戸後期の女旅日記を例に―
  ユディット・アロカイ（ハイデルベルク大学）

＊使用言語：日本語、発表 20 分・質疑 10 分。発表要旨は裏面をご参照ください。

2020 年 12 月 12 日（土）
17：00～19：30
＊ZOOM によるオンライン開催

参加は事前登録制です（参加登録締切：12 月 7 日）。
ご参加を希望される方は QR コードでお申し込みください！
参加者の方には後日 Zoom の ID と PW をメールアドレスにお送りいたします。

発表① 名所の形成と名所イメージの構築―『平家物語』の築島伝説を手掛かりに―

金 智慧（大阪大学大学院）

『平家物語』を通して伝播された平家の武将たちの逸話や伝説は、中世以降の新しい名所の形成を促し、またそれをモチーフにする文芸作品によっていわゆる名所イメージが築かれた。要するに、或る名所にまつわる物語（オリジナル）と文芸作品により派生された新たな物語（スピンオフ）との相互作用の循環のなか、名所の有する独特なイメージが構築されたといえよう。

本発表ではとりわけ平清盛が大輪田泊の前に築造したと伝わる築島伝説に焦点を当て、築島という名所に関わる芸能・美術作品（幸若舞「築島」、絵巻「築島物語絵巻」「経ケ島縁起」など）を分析し、名所イメージが構築されていく過程を辿る。さらに、近世期の地誌類（『兵庫名所記』、『摂津名所図会』など）における記述を踏まえ、その名所イメージが後世においていかに認識されていたのかを明らかにする。

発表② 『摂津名所図会』における名所形成と近世演劇―「逆櫓松」「朝日神明宮」を例として―

岡部 祐佳（大阪大学大学院）

『摂津名所図会』は「孔雀茶屋」など当代の風物を紹介する一方、『平家物語』『大和物語』あるいは能「江口」といった古典作品ゆかりの地を名所として載せている。「逆櫓松」もその一つであり、源義経・梶原景時による逆櫓争が行われた場所として『平家物語』の引用とともに紹介されている。しかし、後に暁鐘成『摂津名所図会大成』（安政 2 年（1855）頃成立）が指摘する通り、この「逆櫓松」は『平家物語』ではなくむしろ近世演劇『ひらかな盛衰記』（元文 4 年（1739）4月、大坂・竹本座初演）の影響を大きく受けて形成された名所であった。

本発表では、同じく逆櫓争と関連する場所とされる「朝日神明宮」との関わりも交えながら、名所「逆櫓松」の形成過程を検討することで、近世期の名所形成における当代演劇の影響の一端を明らかにしたい。

発表③ 19 世紀における地誌の広がり―名所図会と奇談的地誌―

木越 俊介（国文学研究資料館）

19世紀初頭、享和～文化年間の名所図会を対象に、本文と絵における奇談的要素を探った結果、仏説は例外として、多くが基本的には古典や故事に基づくことが明らかになった。そこには名所図会なりの娯楽性と同時に、同時代の奇談などは原則採らないという一貫した編集態度が認められる。まずはこの点を資料とともに確認したい。

一方で、同時期に諸国奇談ものと呼ばれる一群の作品も多く刊行されているが、その中からスタイルのみを装った旧来型の怪談集は淘汰され、徐々に地誌的な記述の中に奇談が含まれる様式が定着するように思われる。具体的には、『奇遊談』（1799 刊）、『北越奇談』（1812 刊）『信濃奇談』（1829 刊）、『信濃奇区一覧（信濃奇勝録）』（1835 成、1887 刊）などがあげられる。この系譜は、『諸国里人談』（1743 刊）や『東西遊記』（1795～98 刊）などの路線を継承するものではあるが、いずれもある固有の地域に特化した記述となっている点に特色がある。こうした奇談的地誌は、未知の珍しい事柄を紹介する報告的な地誌と位置づけられ、いわば奇観とでもいう観点を導入することにより、結果として、「名所」という枠内には収まりきらない土地の情報・記録を拡張して記述する役割を果たしたといえるのではないだろうか。

発表④ 紀行文と名所―江戸後期の女旅日記を例に―

ユディット・アロカイ（ハイデルベルク大学）

主に和歌から発生した歌枕・名所はジャンルの境界を越えて、色々なテクストの中に現れるが、地理的な地名と言うよりもその場所の詩歌的、文学的、文化的なイメージを伝えている。中古・中世の歌人は地名のイメージを無視して和歌を詠むことは許されないが、旅をしても現実の風景よりも歌枕のイメージを生かしながら和歌を詠んだり、風景描写をしたりする。これは中世ヨーロッパで聖書の道をたどって旅する詩人が書いたものとはほぼ同じような現象である。聖書に現れる場所や風景をその神聖なテクストのままに描写するというのは、文化的に高い価値を持つテクストの規範から離れられないということを証明している。

しかし、江戸時代に入ると、社会階級を問わず、旅する人の数が増え、自らの旅の経験を記すテクストも増えてくる。旅と旅日記の目的や旅する人の教養にもよるが、旅日記ではポエティックなイメージがよく現れる。そこで歌枕・名所は消えることなく、旅程の企画だけではなく、場所の描写にまで影響を与え続けるが、しだいに古典の歌枕のイメージが変わって、薄まって来る。その過程を考察することによって和歌史上だけではなく、社会の中の和歌・古典認識や教養についての情報も読み取れる。ここで紹介したいのは、文政年間に、ある神田出身の女性、中村いと、によって書かれた旅日記に現れる歌枕・名所意識と風景描写である。